

## It takes O to do 構文について\*

横 村 栄 美

### 0. はじめに

英語動詞 take は多くの意味をもち、様々な構文と結びつく。例えば, take の結びつく構文に、次のような構文がある。

- (1) It takes three years to make a hamburger.
- (2) It takes a judge to cut through the fudge.

(1)と(2)はどちらも、「It takes O to do」という形をとっている。この構文は、参与者(特に動作主)を特定し、それを主語にしたり、for O の形で挿入することが可能である。しかし、この動作主の特定は(2)の文を言い換えた(4)では容認されず、非文となる。

- (3) We take three years to make a hamburger.
- (4) \*We take a judge to cut through the fudge.

なぜ同じ構文であるのに同じ言い換えができないのか。

そこで、本研究では「It takes O to do」構文(以下「It takes 構文」と省

---

\* この論文を書くに当たり、分析の際にインフォーマントとして例文に対するコメントをしてくださった Shawn Clankie 氏, Brian Perry 氏, Mark Holst 氏に深くお礼を申し上げたい。特に, Holst 氏からは例文に関する細かい指摘をしていただいた。また、助言をしていただいた多くの方々にこの場を借りてお礼を申し上げます。

略する)における動作主の言語化の可否を目的語句の種類から考察する。また、動作主が特定できない場合の目的語句と It takes 構文を構成する語彙項目の分析を行い、この構文について詳しく述べる。

次章では Yokomura (2003)で行われた動詞 take の分析を概観し、take のとる目的語句の種類について述べる。2章では It takes 構文のとる目的語の種類について、3章では It takes 構文における it, take, to do 句の意味関係を考察する。先行詞としての it は仮主語として意味のないものとして扱われることが多いが、ここでは Langacker (1993, 1995) の提案する参照点構造を用いることで、it が持つ参照点としての機能を明らかにし、It takes 構文について、構文の持つ意味にも触れる。

## 1. Yokomura (2003) における動詞 take の取る目的語

Yokomura (2003) では、Norvig and Lakoff (1987) の分析を元に、多義語であり、同義・反義の関係になる4つの動詞 take, get, bring, give の参与者役割を分析した。その中で、動詞 take は patient を目的語としてとり、“Agent moves Patient to Recipient, and Recipient receives Patient (A=R)”という基本的な意味からそれぞれの参与者が意味拡張し、新たな意味ができていたことを示した。Agent, patient, recipient はそれぞれ「人」、「物体」、「人」が take の取る基本的な参与者役割であるが、物体が agent のように喩えられたり、人が patient のように動かされる対象として扱われたり、また recipient が人ではなく destination (patient の到達地点) に変化することによって新たな take の意味を作り出している。例えば、(5)は基本となる参与者役割が言語化された文であり、(6)は agent が意味拡張し、物体が agent となっている例である。(7), (8)は patient が意味拡張し、物体ではなく人や行為が patient となった例であり、(9)は patient の行き先が recipient ではなく destination となって言語化された例である。

- (5) He took the glass from the shelf.
- (6) The book takes its title from Dante.
- (7) She took her son in her arms.
- (8) She took a bath.
- (9) Take the car to garage to be repaired.

Yokomura の分析では、動詞 take の取る基本的な patient は、agent によって簡単に支配され、扱われる物体である。これは(5)の the glass のようなものである。The glass は agent が簡単に持ったり、動かしたりできる物体である。

Patient が default から意味拡張し、物体以外のものが patient となる場として、(7)と(8)がある。例えば、(7)は patient が子ども（つまり「人」）であり、her son は外部から she の力で she の dominion に取り込まれている。(8)は patient がお風呂に入るという「行為」となっており、a bath が示す行為を she が行う様子を表している。She は毎日行ういくつかの行為の中から a bath という行為を自らの dominion に取り込むことでその行為を行うと解釈できる。よって、人や行為も物体同様の解釈ができ、metaphorical extension としての解釈が可能となる。

また、Yokomura では扱われていないが、「時間」も行為同様の解釈ができ、ある一定の時間からまとまった時間を取り出し、実行するという意味に結びつけることができる。(10)の ten minutes が patient である。

- (10) He took ten minutes to solve the problem.

物体と違い、時間は抽象概念であるため、ある地点からある dominion へ取り込むということはできない。しかし、例えば、I don't have the time to give you. や You don't use your time profitably. (Lakoff and Johnson 1980: 8) のように、私たちは metaphor を用いて時間を物体のように表現することが

できる。従って、three years も物体同様の解釈ができるといえる。

以上を見てきたように、動詞 take は目的語として patient をとり、それは「物体」「人」「行為」「時間」といった種類であることがわかる。これらはどれも、比喩的であれ、agent が手を伸ばし、掴み、recipient の領域に移動することが可能であるという共通点がある。また、移動の際に、これらの patient はもともとあった場所から減ったり、なくなったりするものであることがわかる。

## 2. It takes 構文における目的語の種類

It takes 文が動作主を言語化できる場合とできない場合の違いは目的語の違いに関連しているようである。2章では、1章で挙げた take の目的語として現れる patient の種類と It takes 構文に表れる目的語の種類について比較検討する。

### 2.1 参加者の特定ができる場合の目的語の種類

前章で見た動詞 take のとる目的語の種類は同様に It takes 構文でも見られる。これは前掲した例文(1)が該当する。

(1) It takes three years to make a hamburger.

この文では時間である three years が take の目的語となっている。この文には参加者が現れていないが、It を人に変えたり、二重目的語や for 句の挿入によって参加者の特定が可能となる<sup>1</sup>。

<sup>1</sup> It はもともと代名詞としての特性を持つため、it の指示対象は話し手にとって既知情報でなくてはならず、新情報として it から始まる文を用いることはできない。

- (5) We take three years to make a hamburger.  
 (11) It takes us three years to make a hamburger.  
 (12) It takes three years for us to make a hamburger.

これらは全て同じ意味を表しているわけではないが、似た状況を表しているといえる<sup>2</sup>。これらの文に共通しているのは、to make a hamburger という条件を達成するためには three years がかかる (必要である) ということである。また、(1)以外の例として、take の目的語が人や物体である文も参加者の特定が可能である。

- (13) a. It takes two to tango.  
       → b. We take two to tango.  
       → c. It takes us two to tango.  
       → d. It takes two for us to tango.  
 (14) a. It takes a pack to raise a puppy.  
       → b. We take a pack to raise a puppy.  
       → c. It takes us a pack to raise a puppy.  
       → d. It takes a pack for us to raise a puppy.

It takes 文で参加者が特定できたり、参加者を主語にして言い換えられる場合の目的語は動詞 take の言語化する基本的な patient と同様、「簡単に動かすことのできるもの」であり、「動かすことによって元々あった場所から減ったりなくなったりするもの」であることがわかる。

<sup>2</sup> (5), (11), (12)は英語学習の際に同じ意味の言い換えとして扱われることがあるが、実際は何を参照点として機能させるかや心的走査の仕方が違うため、安易に同じ意味を表すとは言えない (しかし、著者の手元にある英語文法書や辞書には「同じ意味を表すので言いかえが可能である」というような説明があり、学習者が誤解してしまうのではないか。)

## 2.2 参加者の特定ができない場合の目的語の種類

It takes 文は全て参加者を言語化できるわけではない。(15)から(17)は主語を人にしたり, for 句を伴うことはできない。

(15) It takes a judge to cut through the fudge. (= (2))

→ \*We take a judge to cut through the fudge.

→ \*It takes us a judge to cut through the fudge.

→ \*It takes a judge for us to cut through the fudge.

(16) It takes a village to raise a child.

→ \*We take a village to raise a child.

→ \*It takes us a village to raise a child.

→ \*It takes a village for us to raise a child.

(17) It takes strength and stamina to be a long-distance runner.

→ \*We take strength and stamina to be a long-distance runner.

→ \*It takes us strength and stamina to be a long-distance runner.

→ \*It takes strength and stamina for us to be a long-distance runner.

(15)から(17)はどれも, to do 句を達成するためには目的語句を条件として必要とすることを意味している。この点は(1), (13), (14)と同じであるが, 目的語句が物体ではなく, 条件や動かすことができないような抽象的な概念であり, 動作主の意志で簡単に動かしたり, 動作主の領域に取り込むことができないものである。仮にこれらの目的語句を物体の比喩として扱ったとしても, 「移動によって始点から減ったり, なくなったりするもの」という条件が満たされず, そのため, 目的語句を動かす主体が見えず, 動作主を特定することができない。

動詞 take の目的語としてとることのできる「簡単に動かすことのできるもの」という概念から外れたものであるのに, なぜ It takes 構文では take の

目的語として条件などをとることができるのか。これにはもう少しこの構文について考えてみる必要がある。そこで、次章では It takes 構文における it の役割や take の意味、it と to do 句の関係について考察する。

### 3. It takes 構文の分析

It takes 構文や天候・時刻等を表す構文、後方照応、強調構文等に見られる it は仮の主語であり、特に意味はないなどと論じられてきた。日本の英語文法書を見ても、「仮主語の it」「虚辞の it」「形式主語の it」等として取り上げられる場合、「特に指すものはなく(江川 1991: 47)」とか、「…形式主語に it を使うのは、長い主語が前に出て頭でっかち (top-heavy) の格好の悪い文ができるのを避けるためである(同: 50)」といったように、it は主語として何か入れなくてはならないからとりあえず入れたのだから、意味はない、といった解釈がなされている。実際、意味役割 (thematic role/semantic role) を基に分析した場合、it には意味役割がなく、空の主語として扱われている。

しかし、代名詞 it と that の比較研究 (Kamio and Thomas 1998; 上山 2001; 高橋 2002), there 等との意味の比較や照応表現に用いられる指示詞の研究 (Ariel 1988; Gundel, Hedburg and Zacharski 1993) などにより、it の機能が明らかにされてきた。さらに、Langacker (1993, 1995) の提案した参照点構造の概念によって、繰上げ構文に見られる it や there などの指示詞も意味を持つものとして説明が可能となってきた。

本章では Langacker の提案する参照点構造を応用して、「意味のないもの」などとして扱われがちな it の機能を明らかにする。

#### 3.1 参照点構造による It takes 構文の分析

Langacker のいう参照点構造とは、ある際立った目印 (参照点: R) を経由して目的地 (ターゲット: T) に到達することを意味している。例えば、日本語で「リュウの毛の色は斑だ」というとき、話し手ないし聞き手は所有

を表す「リュウの」が参照点となって「毛の色」に注意を向けることになる。また、英文 “She bought Lakoff and Johnson.” は、彼女が買ったものは人間ではなく本であり、この時間き手は “Lakoff and Johnson” を参照点として、それらの人間の書いた本(ターゲット)を買ったと解釈できる<sup>3</sup>。Langacker はこの構造を次のような図で表している。楕円の外にある円は概念化者 (C: conceptualizer=話し手ないし聞き手)、楕円の中の線の太い円は参照点 (R)、線の細い円はターゲット (T) を表している。楕円は参照点の支配域 (D: 参照点を用いて説明できる範囲) であり、点線の矢印は概念化者が注意を向ける方向を表している。

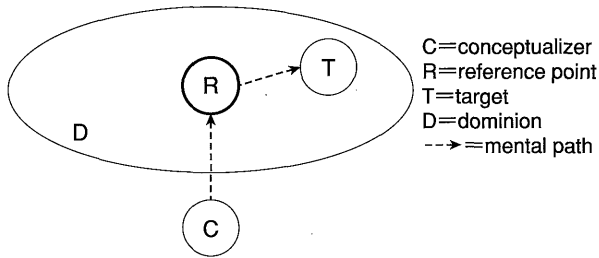


図 3.1 参照点構造 (Langacker 1993: 6)

Langacker はこの概念を用いて繰り上げ構文に見られる *it*, *there* に言及している。河上 (1996) は Langacker の説明を用いて次のように述べている。

- (18) 統語的ダミー要素である *it*, *there* は各々、抽象的ではあるが意味をもつと考えられる。それらは、時間的・空間的にも不特定で抽象的なセッティ

<sup>3</sup> Langacker は、参照点の概念は *metonymy* や *active zone* とも関連し、私たちの日常でかなり頻繁に使われている言語現象であると説明している。しかし、ここでは参照点概念の説明だけに議論を絞るため、*metonymy* や *active zone* についての詳しい説明はしない。



ングを指定し、その後続く要素を導入するための提示的フレームとして機能するのである。(中略)このようなセッティングは、その中で起こる事態を指し示すための「参照点」として働くことができ、従って、(it や)there を繰り上げ構文で用いることができるのである。(河上, 1996: 142) (括弧は著者)

(18)を It takes 構文の it と to do 句に当てはめると、次のような説明ができる。It は参照点として抽象的な場面を指定し、その場面の中で機能する take の意味と目的語、to do 句の関係を表している。It takes 構文の参照点構造を用いた概念を図 3.2 に示す。

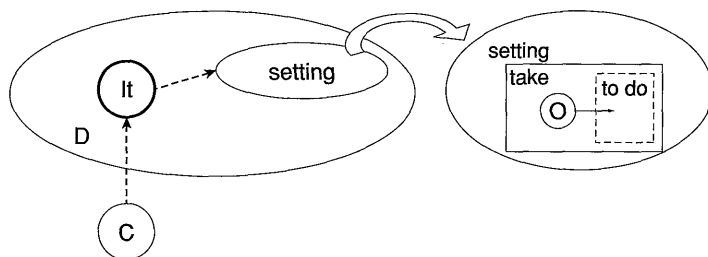


図 3.2 It takes 構文の参照点構造

左の大きな楕円の外にある円は概念化者(C)、楕円の中にある太い円は参照点となる It、小さな楕円はターゲットとなる場面 (setting) を表している。右の楕円は場面である setting を拡大して示したものである。場面は take の意味と関連しており、目的語句が to do 句へ移動することで to do 句の内容が達成されることを表している。

### 3.2 It takes 構文における動詞 take の意味・役割

It takes 構文では参加者が言語化されていないが、動詞 take の持つ基本的意味である “Agent moves Patient to Recipient, and Recipient receives

Patient (A=R)”のうち, “to move Patient to Recipient (or Destination)”の概念が見られる。基本的な take の例である(5), 意味拡張した(10), そして It takes 構文である(1), (2)を再掲し, take の意味を比較する。

- (5) He took the glass from the shelf.  
 (10) He took ten minutes to solve the problem.  
 (1) It takes three years to make a hamburger.  
 (2) It takes a judge to cut through the fudge.

(5)と(10)に共通してある概念である, 「agent が patient を recipient 又は destination へ『運ぶ・持っていく』」という意味は, (1)(2)の It takes 構文の take にもあり, 目的語句を to do 句に「運ぶ・持って行く」という概念を形成している。It takes 文の場合は動作主が言語化されないため, 目的語句を to do 句を達成すべく「移動する」といった方が良いかもしれない。

It takes 文が抽象的場面を表しているとするれば, 「ある行為を達成するために必要とする条件」として物体以外の抽象概念を目的語として容認できる。Take の持つ意味が It takes 構文に現れるため, 日本語にすると同じ「必要とする」という意味になる need や「時間がかかる」に対応する cost とは結びつかない構文を作ることが可能となっている<sup>4</sup>。

#### 4. おわりに

以上, 本研究では It takes 構文について分析し, take の基本的意味からの

<sup>4</sup> Need は動作主にとって欠けているものを「必要とする」という意味で用いられる点で take の意味と異なる。また, cost は “It costs O to do” の形を取ることもあるが, 動作主がお金や時間を自らの意志で「かける」という意味も含んでいる点で take のような場面を表すことができない。これらの動詞の詳しい意味については小西 (1980) を参照。

発展という観点からと、参照点構造を用いての構文の考察を試みた。これにより、It takes 構文はある場面において物事を達成する条件を目的語句としてとり、従って take の基本的な参与者から外れた項目も目的語句にできることが明らかになった。また、意味のないものとして扱われがちな it について、参照点構造の観点から考察することで it の機能を示した。It は日本語訳としてふさわしい言葉がないとき、「意味のない」ものとして扱われがちであるが、認知の観点からみれば参照点としての機能を持っており、to do 句が長いから主語を it で言い換えるというような、文法書に見られる説明は適切ではないといえよう。

## 参考文献

- Ariel, M. (1988) 'Referring and Accessibility.' *Journal of Linguistics* 24: 67-87
- 江川泰一郎 (1991) 『英法解説』 金子書房
- Gundel, J. K., N.Hedburg & R.Zacharski (1993) 'Cognitive Status and the Form of Referring Expression in Discourse.' *Language* 69-2: 274-307
- Kamio, A & M.Thomas (1998) 'Some Referential Properties of English It and That.' In Kamio, A. and K.Takai (eds.), *Function and Structure*, Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins, pp. 289-315
- 川上誓作 (1996) 『認知言語学の基礎』 研究社出版
- 小西友七 (1980) 『英語基本動詞辞典』 研究社出版
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald, W. (1993) 'Reference-Point Constructions.' *Cognitive Linguistics* 4: 1-38
- Langacker, Ronald, W. (1995) 'Raising and Transparency.' *Language* 71: 1-62
- Norvig, Peter and George Lakoff (1987) 'Taking: A study in Lexical Network Theory.' *BLS* 13: 195-206
- 上山恭男 (2001) 「代名詞 it の指示特性：「それ」との比較による it の理解」『函館英文学』第 40 号 pp.51-71
- 高橋英光 (2002) 「it と that について」『北大文学研究科紀要』108 号 pp.101-121
- Yokomura, Emi (2003) 'Synonymy and Antonymy among the Four Basic Verbs take, get, bring and give in the SVO/SVOO Constructions.' *Otaru Shouka Daigaku Jinbun Kenkyu (The Review of Liberal Arts)* 106: 147-167  
(例文引用)
- ジーニアス英和辞典 第 2 版 1994 大修館
- プログレッシブ英和辞典 第 2 版 1987 小学館

ロングマン英英辞典 1995 Longman  
Reader's Digest June, July 2003  
British National Corpus (<http://www.natcorp.ox.ac.uk/>)  
Yahoo! USA (<http://www.yahoo.com>)